



TITLE:

# <大會抄録>『史記』の構成と「易」の思想

AUTHOR(S):

上田, 早苗

---

CITATION:

上田, 早苗. <大會抄録>『史記』の構成と「易」の思想. 東洋史研究  
1978, 37(3): 452-453

ISSUE DATE:

1978-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153703>

RIGHT:

な史料を寄與する事にもなろう。

本論は以上の點をふまえて、地圖の新解釋を示し、都市圖解讀法の開拓をめざすものであるが、手順としてまず蘇州の變遷を地圖から讀みとるを試みる。

### 明末清初、江南郷紳の權力構造

川 勝 守

今日、明清史研究においては、郷紳論あるいは郷紳問題を取り上げることが極めて盛んであり、一種の流行の感を呈している。しかし、郷紳問題が關係するところと言えば、國家政治から地域社會の運営に至るまでの、各段階における徵稅・治安維持・勸農救恤・裁判教化、さらには市場支配や世論指導等々と言った、極めて廣範圍にわたるものであり、それ故に、この時代の研究者はどのようなテーマを扱っても、必ずや郷紳の問題と結びつくことになる。それだけに、郷紳とかその政治的社會的存在の表現たる郷紳支配なるものの概念規定や、機能・役割評價の特徴ということになると、研究者により様々な事例が抽出され、それにより人ごとになり異なる理解がなされるようである。また、具體的問題を提起すれば、明後期に登場した郷紳存在は、清朝國家の中で全面的に開花するというのが、このことはいかなる歴史事象に即して説明されるのであろうか。本報告は、一般に「郷紳の横」「官府の把持」といわれる事態を、明末、常熟の錢謙益に對する「民」の訴えと、清初康熙中葉に

おける崑山徐乾學に對する訴訟事件との二事例について、具體的に究明することに努力しながら、江南郷紳の權力構造の一つの型を明らかにしてみたい。

資料 「張漢儒疏稿」他（『虞陽說苑甲編』）

「徐乾學等被控狀」（『文獻叢編』四・五）

### 『史記』の構成と「易」の思想

上 田 早 苗

『史記』は古代の人々が共通して持っていた認識方式（創造）と死（破滅）とが永遠に繰り返えされる——にもとづいて歴史を記述しており、それは循環史觀とならざるを得ない。太古の黃帝（土德）より始まった歴史は、木德の夏、金德の殷、火德の周、水德の秦と王朝が交代するが、王朝滅亡の原因を洪水や暴虐とみなしているのも、民間説話に普遍的に見られるパターンである。始皇の暴虐によつて最大のカストロフ（破局）を迎え、ここに黃帝以來の文化は盡く滅亡する。しかしこのカオス（混沌）の状況からやがて高祖劉邦が出現し、蛇を斬ってコスモス（秩序）へと轉換し、中國は再生されるのである。『史記』の作者は上古の黃帝より始めて一巡して再び土德に戻った今上武帝の太初元年に至る一周期の通史を著そうとしたのであり、従つて黃帝と武帝との事蹟には類似するところがきわめておおい。王朝の交替を五行にあてて説明するのは、五行相勝説とされているが、しかし司馬遷は「易は天地陰陽四時五

行を著わす、故に變に長ず」(『太史公自序』)とあるごとく、易のうち五行をも含めて理解していたのである。『史記』は黄老とこの五行をも含めた「易」の思想にもとづいて編纂されているが、『史記』全體の構想は易と道論(道家黄老)とを學んだとする司馬談が打ち出したことを暗示している。

### 敦煌・吐魯番の古代土地制度をめぐって

池田 溫

中國西陲の敦煌・吐魯番二地方については、豊富な文書資料の解讀・分析を通じ、正史以下の傳存文獻では到底窺い得ぬ古代の土地所有・耕營の具體的データが知られ、均田制の施行や租佃制の實態など重要な問題に照明があてられ多くの議論が集中してきたことは周知の通りである。

近年新出文書も加わり地域の事情もおいおい明瞭になってくると、兩地の土地制度を客觀的に評價しその地方的特質を正しく位置付ける方向が當然要請される。本報告はそのためのささやかなこころみである。

大谷文書の欠田・退田・給田簿等により、開元末年西州高昌縣(吐魯番)で均田制の田地還授がひろく實施されていたと認める通説(西嶋定生・西村元佑・仁井田陞・堀敏一・楊聯陞・D. Twitchett等)に對し、根本から疑問を呈しそれを屯田文書とみなす宮崎市定説について、今日の知見に立つて再検討を試みることは、この地の給田

制の特徴を理解するに有益な作業となろう。

次に吐魯番と敦煌の土地制度の差異(田種・租佃普及度・公權の介入程度等)をとりあげその背景を考えてみたい。

なお敦煌では八世紀末から數十年間吐蕃に占領されたが、そこで基準單位ドル(突、一〇畝)による田地計量、分給、課税が行われ、後の歸義軍時代の文書に頻出する土地區劃「畦」の記載にまで影響が及んだとみられる點も、敦煌の土地制度の特殊性を示している。

### 一六八六年のマドラス「ブラックタウン」

事件

重松 伸司

一六八六年一月、マドラス市(マドラスバットナム)のインド人居住區Ⅱブラックタウンで、突如諸カースト集團によるハルタール(一勢罷業)が起こった。この蜂起はマドラスのイギリス東インド會社を大いに驚かせたが、わずか數日にして終熄してしまつた。

當時東インド會社はゴルコンダのムスリム領主と對立しており、商館都市の城壁構築の必要に迫られ、その費用捻出という名目でインド人に對して新税 House Tax を賦課した。この新税への反對が蜂起の發端であつた。しかし蜂起は單なる反税運動とは異なる性格を持つていたと考えられる。すなわち、新興都市マドラスに集積した、インド人商人及び織布工を中心とするギルド蜂起であり、ギル